

## V. 総 括

### 1. 佐賀平野検出の古代道路構造

#### (1) はじめに

脊振山南麓を東西方向にはしる古代道路跡はこれまで本事業で6地点、その他の調査例として8地点の発掘調査が実施された。吉野ヶ里遺跡の志波屋三の坪、四の坪地区や鶴前田遺跡例のように広範囲な開発に伴う調査もあれば幅数メートルのみの調査もあり検出した遺構をもって道路跡と確定できない調査事例も多い。従って報告書、報告文には道路状遺構といった記述が多く見られる。しかし、歴史地理学的研究方法による空中写真からは直線的な道路痕跡が認められ、神埼郡ではそれに沿って「大道」、「横大路」といった地名が存在し、遺存条里地割の東西線と一致し、里界線にもあたる。このような歴史地理学的方法による事実の蓄積は全国的において実施され、同様の事例が多くみられその道路痕跡は発掘調査によって道路跡であることが追認されている。したがって、佐賀平野の道路痕跡および調査にて検出された道路状遺構も積極的に道路跡ということができよう。しかし、その遺構も一様ではなくそれゆえに道路跡と断定できないことも多い。ここでは調査によって確認された遺構から道路の規模や構造についてのべてみたい。

#### (2) 道路の規模・構造に関する研究

発掘調査事例の増加に伴って古代道路の規模や構造について論じられることも多くなった。木下(1990)は畿内および諸道にて確認された古代道路25例をもとにその道幅は約6m、9m、12mなど3mの倍数を示すものが多く、3mはほぼ一丈にあたるから古代道路は丈単位で設定されたと考えた。さらにこの規模の違いについては各道路の検討から奈良時代の駅路などの幹線道は四丈(12m)、地方道は二丈を基準とし、平安時代にはその規模も縮小し幹線道も二丈になったと考えた。さらに道路構造については、基本的には古代道路は両側溝を備え一般的には路面を区画し排水に用いられる側溝は幅0.6~1m程であろうが灌漑水路としても機能したと考えられ、群馬県矢原遺跡南側溝に堰跡や分水路があることを指摘している。

道路路面で検出される円形ないしは楕円形の土坑列は波板状痕跡と呼ばれるがこの性格について早川氏、飯田氏らが論じている。早川泉(1991)は東山道武蔵路にあたる東京都国分寺市、府中市で検出された波板状痕跡をもとに他地区の類例も集め、その性格について重量物運搬の際に用いられたコロや枕木として利用された丸太の路面に残された圧痕と考えた。飯田充晴(1993)は埼玉県所沢市東の上遺跡で検出した道路跡に残る波板状痕跡について入念に検討した。構築にあたってはまず、道路基盤の荒掘り時に路面にあたる部分を皿状に掘削し地盤は凹凸面に仕上げる。その中にロームブロック、ロームブロックと黒色土、黒色土の3層を客土しながら転圧し路床をつくる。それは平坦に仕上げるのではなく加圧のため波板状になる。さらに硬化された波板状を呈する路床の上に最終工程として黒色土による客土と転圧を施し舗装面を完成している。すなわち、波板状痕跡は道路構築にあたっての基礎工事の痕跡との見解を示した。両氏に先立ち北郷泰道(1987)、中間研志(1988)は古代官道ではないものの道路跡にて確認できた波板状痕跡について枕木などの痕跡との見解を示している。近江俊秀(1994)は奈良県御所市鴨神遺跡で検出した古墳時代の道路跡は地盤の状況に応じて構築工法が違うことを確認した。さらに全国的に道路跡の構築方法を検討し道路がつくられる地形や状況に応じて構築方法も異なり、早川、飯田氏説両方があることを明らかにした。

山村信榮(1993)は西海道内の道路施行方法を4つに分類している。Aタイプは安定した地盤で平地に施工さ

れ、芯々間10mを越える二条の溝を掘る。側溝形状は底が一定の傾斜をもつ完全な溝状をなすものと底が起伏のある連続土坑状のものがある。B、Cタイプは丘陵部に施工される方法でBタイプは緩やかな丘陵部のカット工法、Cタイプは急斜面をもつ丘陵の「切り通し」である。Dタイプは地盤が湿地などで脆弱な地形部分の盛土整地工法で、低湿地には堤状の土橋が版築工法を用いてつくられるとしている。

この様に発掘調査事例の増加に伴い90年代にはいり道幅や道路面に残された波板状痕跡の性格、地形による道路施工方法の分類などについて論ぜられた。

### (3) 佐賀平野検出の道路跡

調査によって道路跡と推定された場合その遺構は道路の側溝が大半である。路面は削平を受けている事例が多く路面幅は明確にできない。そのため道路の規模を示す道幅は両側溝の芯心距離をもって道幅としたりする。また、トレンチ調査の場合検出した溝をもって道路の側溝と認めることは非常に難しいし、出土遺物も限られるため時期決定が困難である。県内の調査事例について Tab.5 に示す。この事例も大半がトレンチ調査という制約があることを付け加えておきたい。

芯々距離でみると最大規模は鶴前田遺跡が16~17m、続いて吉野ヶ里遺跡が13~16mである。鶴前田遺跡は本報告がなされていないため詳細不明であるが少なくとも出土遺物から古代道路は中世、近世段階で再利用されていたようであり、当該時期に側溝を再掘削した可能性がある。他の事例で側溝が明瞭に確認できた大野原遺跡では8m、比較的明瞭に確認できた大野原A遺跡で10.5m、東高田遺跡で9.7m、中園遺跡で8.8mであり吉野ヶ里遺跡例以外は8~11mを測る。また、丘陵を切り通して敷設された鳥の隈遺跡の道路跡は推定5.5mを測り平坦地のそれより狭まる。吉野ヶ里遺跡の切り通しも同様の傾向があり、丘陵を切り通した場合道幅は狭くなる。

吉野ヶ里遺跡検出の道路跡は志波屋四の坪地区で延長約70mを測り、両側溝が明確に検出されており佐賀平野の道路跡としてはひとまわり大きい。吉野ヶ里遺跡の道路跡周辺では官衙的な配置をした建物群が確認されており、道路跡が他の事例よりやや大きいのはそのためではなかろうか。こうしてみると佐賀平野の平坦地に敷設された道路跡の芯々距離は約8~11mである。

側溝については鍵尼遺跡、鳥の隈遺跡の幅0.6mから最大では吉野ヶ里遺跡、中園遺跡の幅5mを測るものでその規模は様々である。また、両側溝が同一規模である例が少なくどちらかが大きい傾向があるのは側溝が灌漑水路を兼ねているためであろう。また、側溝で注目されるものに鳥の隈遺跡の礫敷きの側溝がある。鳥の隈遺跡は比高差5~6mを測る大規模なオープンカット工法でつくられAⅡa類に分類される。(分類法は後述する。)AⅡa類は他に吉野ヶ里遺跡でみられるが路面は未調査ゆえに側溝の有無は確認できていなかった。ところが鳥の隈遺跡では断面逆台形で幅60~70cm、深さ10cmを測る側溝を確認した。溝底には径5cm以下の小礫を敷き詰めそれを粘土でセメント状に固めるという入念な作りであった。類例がないためその性格は不明であるが推測すると切り通しという地形ゆえに側溝には多量の水が流れるであろう。流水対策として礫敷きの側溝をつくったのであろう。

道路の施工方法は地形によって異なる。このことは先学によっても論じられているとおりである。比高差のある丘陵は切り通し状に大規模に掘削し道路をつくる。また、湿地などの脆弱な地形では盛土を施す。また、県内の調査事例をみると道路幅相当を断面形皿状に掘り窪める事例が東古賀遺跡、大野原B遺跡、迎田遺跡、唐香原・祇園原遺跡などでみられる。これらはいずれも沖積地であり路床を掘り窪め客土し、版築状に固めることにより、より強度な路面を保持する効果があったと思われる。ただし県内の事例では埼玉県所沢市東の上遺跡例のように波板状の痕跡はみられない。

Tab. 5 佐賀県内道路跡一覧

遺 跡 名 (地 区 名)	所 在 地	道路幅 m 芯々距離	北側溝 m		南側溝 m		工 法	文 献
			幅	深さ	幅	深さ		
鍵 尼	大 和 町		0.6	0.2			A1a	本 書
東 古 賀	大 和 町	地山を皿状に深さ約0.6m掘り窪める。					Cc	本 書
松 原	佐 賀 市	10.5	0.8	0.2	1.4	0.15	Ca	本 書
大 野 原 A	佐 賀 市	10.5	2.5~1.5	0.3	1.0	0.25	Ca	本 書
大 野 原 B	佐 賀 市	地山を幅12~16m、深さ0.2~0.3m掘り窪める。					Cc	本 書
大 野 原	佐 賀 市	8	0.6~0.9	0.2~0.3m	1.5	0.3	Ca	1
東 高 田	佐 賀 市	9.7	3.8	1.0	2.4	1.0	Cac	2
迎 田	神 埼 町	地山を幅5.2m、深さ0.4m掘り窪める。					Cc 1	3
迎 田 Ⅲ	神 埼 町	幅15mの硬化面、側溝なし。					Ca	4
迎 田 Ⅳ	神 埼 町	14.4	1.3	0.4	0.6	0.1	Ca	4
"	神 埼 町	5.6	2.1	0.35	0.6	0.1	Ca	4
野 島	神 埼 町	8	硬化面の検出。				Cb	5
唐香原・祇園原	神 埼 町	地山を皿状に幅約8 m掘り窪める。					A1c1	本 書
鶴 籠	神 埼 町	硬化面の検出。					Cb	
鶴 前 田	神 埼 町	16~17	2~2.5		2~2.5		Ca	6
中 園	神 埼 町	8.8	2~3.2	0.4	1.2	0.4	Ca	7
中 園	神 埼 町	8.8	0.7	0.25	4~5	0.5	Ca	8
吉 野 ヶ 里	神 埼 町	13~16	2.3~5	0.3	1.5~2.3	0.2	A Ⅱ, Cac 2	9
鳥 の 隈	三田川町	5.3	0.6~0.7	0.1	0.3	0.1	AⅡa	本 書

これらのことから道路の施工法、構築法により分類すると地形による施工方法の分類として A 類はオープンカット工法でさらに A I 類は比高差があまりない(約 4 m 以内)丘陵の切り通し。A II 類は比高差のある丘陵の切り通し。B 類は盛土工法。C 類は平坦地工法とした。さらに個々の道路跡の特性として a 類は両側溝あり。b 類は側溝なし。c 類は路床を皿状に掘り窪める方法でさらに c 1 類は路面部分のみの掘り窪めで c 2 類は側溝を含めた皿状の掘り窪めに細分できる。Tab. 5 にそれぞれの遺跡検出の道路跡の分類を記した。

Ca 類が最も多いのは全国的にみても一般的な傾向と思われるが、Cc 類がみられることは注目される。これまでの先学の道路施工法による分類では路床を皿状に掘り窪めるものはみあたらず、佐賀平野など地山の条件が悪い沖積地にみられる工法の可能性がある。吉野ヶ里遺跡の志波屋四の坪地区の道路工法は両側溝をもつ Ca 類であるが谷をへだてた志波屋三の坪地区では地山土である砂層を幅17m、深さ40cmにわたり皿状に掘り窪めその中に砂礫土を版築状に積み上げる Cc 類である。吉野ヶ里遺跡の道路跡は地形、地質によった道路構築方法の違いがみられ道路構造も多彩である。

東高田遺跡例は皿状窪みの両側に側溝をつくる Cac 2 類であるが他の Cc 類は皿状窪みのみで側溝は検出していない。平坦地であれば側溝は基本的につくられるという前提にたてば Cac 2 類になる可能性もある。皿状窪みの中を版築状に硬め、その路床部分に側溝をつくったのかもしれない。側溝は道路廃絶のちに埋められあるいは削平されたため検出できず、道路基盤である皿状窪みが確認できたと思われる。皿状窪みの幅が吉野ヶ里遺跡志波屋三の坪地区の幅17m、大野原遺跡 B 地点の12~16m は両側溝を含めた道路幅とするなら適当な幅であると思わ

れる。

典型的な盛土工法は直線17kmの路線内にはみられないが、上峰町堤土壘はその可能性がある。この土壘の東方延長線上の八藤遺跡では両側溝をもつ芯々距離6mの道路状遺構が確認されている。道路状遺構の南北両側では奈良時代の掘立柱建物群が確認されており道路状遺構も当時期と考えられる。堤土壘は東西約300m、高さ4～5mを測り、版築状に積まれその中から6世紀末の遺物が出土している。八藤遺跡の道路状遺構との位置関係から堤土壘が盛土による土橋状の道路である可能性は高い。

路面の状況では石敷きや波板状痕跡は確認されていない。鶴前田遺跡では地山土の上に砂質土で整地し、青灰褐色砂質土で仕上げる。一部には砂利敷きの面も確認できている。吉野ヶ里遺跡志波屋三の坪地区では両側溝の北法面に人頭大の河原石が数個遺存し路肩を石で葺いていた可能性も指摘されている。吉野ヶ里遺跡と鶴前田遺跡は至近距離でありこのような重層なつくりは官衙近くの道路であったためであろう。硬化面が確認できたのは神埼町内に多い。いずれも数層からなる整地を施し舗装面を仕上げるがその舗装面が硬化している。

思いつくまま佐賀平野検出の道路構造について述べてきた。トレンチ調査による確認例が大半であり、そのみで道路跡と判断するには材料不足であることはこぼめない。しかし、これまで全国的に展開されてきた歴史地理学的研究とそれを検証してきた発掘調査の成果をあわせるならば佐賀平野で調査されてきた道路状遺構も道路跡に昇格することができよう。

吉野ヶ里遺跡の道路跡は前述のとおりオープンカット工法や路床を皿状に掘り窪めたり多彩な道路構築方法がみられる。このことは無言にしてこれらの工法の存在を実証しているのである。佐賀平野の発掘調査現場をのぞくと甕棺、住居跡、古墳など遺構の大半の上部構造は削平をうけている。道路跡も同様であろう。廃絶したのち耕地にしたりあるいは後世に道路拡幅した場合当時の面影はなくなる。これからの調査では特定が困難な溝一条にも注意を払う必要があろう。

## 参考文献

- 飯田充晴 (1993)「道路築造方法について一埼玉県所沢市東の上遺跡の道路跡を中心にして一」『古代交通研究』2  
近江俊秀 (1994)「奈良県鴨神遺跡の道路状遺構」『季刊考古学』46 雄山閣  
近江俊秀 (1994)「古代道路遺構の構造」『文化財学論集』  
木下 良 (1990)「古代道の道幅と構造一発掘の成果から」『交通史研究』24  
中間研志 (1988)「道路状遺構」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』13  
早川 泉 (1991)「古代道路遺構に残された圧痕」『東京考古』9  
北郷泰道 (1987)「東大寺虹梁と日向」『えとのす』32  
山村信榮 (1993)「大宰府周辺の古代官道」『九州考古学』68  
山村信榮 (1993)「大宰府周辺の道路状遺構」『古代交通研究』2

## 佐賀県内道路一覧文献

1. 西田巖 (1993)『大野原遺跡』佐賀市教育委員会 佐賀市文化財調査報告書第48集
2. 西田巖 (1992)『原ノ町遺跡・東高田遺跡・櫛遺跡・北宿遺跡・南宿遺跡』佐賀市教育委員会 佐賀市文化財調査報告書第38集
3. 松尾吉高 (1992)『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書10』佐賀県教育委員会
4. 八尋実・河野史郎 (1991)『迎田遺跡Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区』神埼町教育委員会 神埼町文化財調査報告書第27集
5. 桑原幸則 (1993)『野島遺跡』佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書11 佐賀県教育委員会佐賀県文化財調査報告書第117集
6. 緒方裕次郎 (1989)「鶴前田遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書7』佐賀県教育委員会
7. 徳富則久編 (1987)『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書5』佐賀県教育委員会
8. 八尋実・緒方裕次郎 (1987)「中園遺跡」『的小洲遺跡12区・中園遺跡』神埼町教育委員会 神埼町文化財調査報告書第14集
9. 七田忠昭ほか (1992)『吉野ヶ里』佐賀県教育委員会